



# 濃昼山道

濃昼山道は、濃昼山道保存会が国有林と協定を結び、幕末から明治期の歴史的な山道を平成の時代によりみがらせるボランティア活動により復元された山道です。

【ご利用にあたって】  
濃昼山道は山岳地を通り、天候の急変もありますので、通行にあたっては、装備等に十分ご注意ください。

## 濃昼山道

【ごきびるさんどう】  
濃 昼 山 道 保 存 会



濃昼峠より厚田側を望む



濃昼峠より浜益側を望む

### 忘れ路の山道を行く



【歴史的な背景について】  
西蝦夷地警備のために、幕府は厚田場所請負人濱屋与三右衛門に命じて、山道の開削に当たられます。同時に、送毛山道、増毛山道（ハマシケ場所請負人伊達林右衛門が開削）も竣工し、遂に道北へ抜ける陸路が完成します。一八五七年（安政四年）、箱館奉行堀利照一行（三一名）が東西蝦夷地・樺太巡見の際、この山道を通っています。その時、松浦武四郎も天塩まで同行します。  
その後、幕府は、一八五九年、天塩と岩内までの警備を庄内藩に命じます。庄内藩は、本陣をハマシケ（現浜益）に、脇本陣をテシホ（天塩）トマイ（苫前）ルルモツ（留萌）に築きます。主な任務は、警備・漁場管理・開墾です。藩士約四四〇名、農民約一三五〇名（浜益村史より）がこの山道を通して、それぞれの地に赴いて行きます。他に、大工・桶屋・炭焼き・味噌醤油の製造者などもいたようです。米・味噌、農具等は船で運んだようです。（現浜益に千両堀り跡有り）  
しかし、一八六八年、戊辰戦争が勃発し、庄内藩は引き揚げてしまいます。  
その後、明治の中頃に一部改修され、現在の山道になったようです。濃昼山道は、まさに歴史的な山道といえます。  
開削当時の山道の様子は「西蝦夷地誌」「丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌（松浦武四郎著）」「入北記（玉蟲左太夫著）」に記されています。

「ゴキビル」とはアイヌ語で「罌の陰・水滴巻く所」の意味です。



### 濃昼山道 30年ぶりに復活



幕末に北方警備の要路として使用  
「豊かな森魅力 家族で散策を」  
濃昼山道保存会が、国有林と協定を結び、幕末から明治期の歴史的な山道を平成の時代によりみがらせるボランティア活動により復元された山道です。

ササ刈り6年、有志ら整備



### 現在に蘇った歴史的な山道

【保存活動について】  
歴史的な濃昼山道の存在を知り、国道の途中から濃昼峠へ出、厚田側に残雪の濃昼山道を鮮明に見ました。（写真参照）その時の感動が基となり、平成一二年、保存会を立ち上げ、石狩・空知森林管理署、石狩支庁のご理解のもとでボランティアでの保存活動を行ってきました。  
沢山の有志によるご協力を頂き、六年目となる平成一七年九月二五日、濃昼と滝の沢トンネル間の開通によりやくごぎつづける事ができました。  
入口、水準点、休憩所、落石注意などの標識もつけましたが、まだ不十分です。これからも手を加え、更に歩きやすい道にしたいと考えています。森や自然の恵みに触れ、ゆつくりと景色や草花を眺めながら、人・自然・歴史とふれ合う、木漏れ日の散策路にしたいと思っています。

濃昼山道保存会  
〒061-1143 北広島市南町3-5-3 TEL 090-6216-7103  
石狩市・林野庁 北海道森林管理局 石狩森林管理署